

JAPAN PRIZE NEWS

財団法人 国際科学技術財団

THE SCIENCE AND TECHNOLOGY
FOUNDATION OF JAPAN (JSTF)

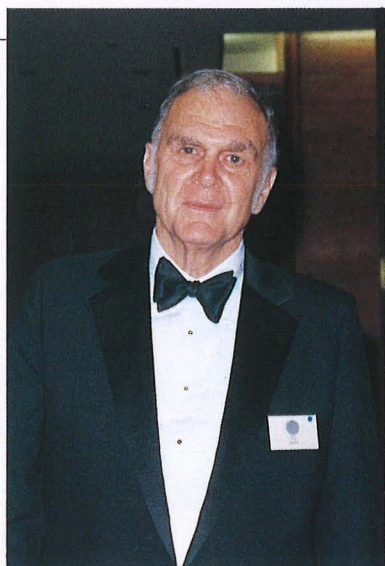
Shisei-Kaikan 5F

1-3 Hibiya-koen, Chiyoda-ku, Tokyo 100, Japan
Tel. (03) 508-7691

No.6
1989年9月



1989年(第5回)「日本国際賞」にローランド博士、コーリー博士 ——環境科学技術／医薬科学の研究でめざましい業績——

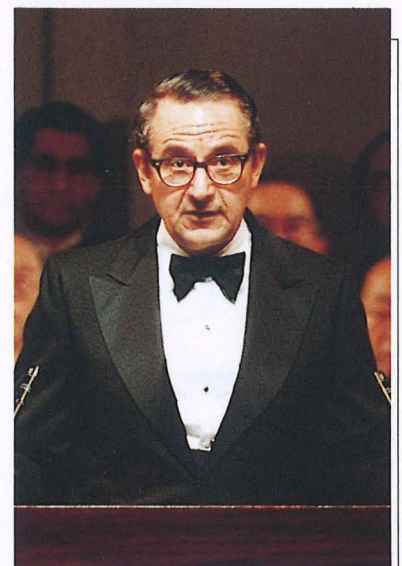


F・シャーウッド・ローランド博士

(財)国際科学技術財団が、世界の科学技術の進歩に寄与し、人類の繁栄と平和に貢献した人々に贈る1989年(第5回)日本国際賞の授賞式が、4月12日、東京・国立劇場で行われました。

今年度の授賞対象分野は「環境科学技術」と「医薬科学」の2つ。両分野合わせて世界各国より407件の推薦のなかから米国の2博士が今年の実賞者に選ばれました。

「環境科学技術」ではフロンガスによるオゾン層破壊のメカニズムを明らかにしたF・シャーウッド・ローランド博士(カリフォルニア大学教授)が、「医薬科学」ではプロスタグランジンの合成開拓でE・J・コーリー博士(ハーバード大学教授)が受賞しました。ローランド博士の研究は、世界的に環境破壊が大きな問題として取り上げられるなか、成層圏オゾン層保護への対応に国際的、社会的に大きな影響を与えたことが、一方のコーリー博士は、その優れた効率性、汎用性、経済性からその後の医薬創製に決定的寄与を果たした合成法を開拓したことが受賞の理由となりました。



E・J・コーリー博士

JAPAN PRIZE

天皇皇后両陛下ご臨席のもと 東京・国立劇場で厳かに授賞式

「今、世界の国々は力を合わせなければ……」とローランド博士

授賞式は、天皇皇后両陛下のご臨席を賜り、在日外国大使、科学アタッシュ、著名な学者・研究者、政界、財界並びに言論界代表ら約1,100名の出席を得、厳かに執り行われました。

式典は、新星日本交響楽団の演奏する「水上の音楽（ヘンデル作曲）」で開幕。横田喜三郎財団理事長の挨拶、向坊審査委員長による審査結果報告及び受賞者紹介、各分野部会長の贈賞理由の説明に続き、日本国際賞の賞

状、賞牌及び副賞5,000万円が横田理事長より両博士に手渡されました。

ローランド博士は、「われわれの所有する唯一の大気圏がより重大な損害を受けないように、世界の国々は力を合わせなければなりません」と決意のほどを示しました。またコーリー博士も「この受賞は医薬科学分野の科学者への評価と若い研究者への励みとなります」と受賞の感動をそのまま表すようなスピーチをされました。



天皇陛下のお言葉(抜粋)

両博士の業績はいずれも環境あるいは医薬の分野における科学技術の進歩に大きく寄与し人類の福祉に著しく貢献するものです。これからの科学技術の進歩が世界の人人々全体のために、良い方向に進められていくことを切に望んでやみません。人類の繁栄と平和を目指す日本国際賞が世界の科学技術のよりよき発展に一層寄与することを願います。



受賞者記者会見(4/10)

受賞両博士は、日本プレスセンターでの合同記者会見に出席。ロンドンでの国際環境会議直後であったことからフロンガス規制に対する関心が高く、ローランド博士には報道関係者の質問が集中しました。



都知事表敬(4/11)

夫人を伴った両博士は、鈴木東京都知事を表敬。日本が大好きという両博士は熱心に日本の首都・東京について質問、都知事と科学談議する場面も見られました。



JAPAN PRIZE

記念講演会など 「日本国際賞週間」に多彩な行事

「科学は人類を一つにする……」とコーリー博士

授賞式に引き続き、東京・ホテルニューオータニにおいて各界名士約500名を招き、国際色豊かな祝宴が開かれました。

今回は日本国際賞が第5回を迎えたことを記念して、ノーベル財団と緊密な関係にあるスウェーデン青年科学者連盟より代表2名が財団の招きで来日、祝宴に花を添えました。

横田理事長の挨拶で幕を開けた祝宴では、ディナーの後、受賞両博士の人柄と業績が改めて紹介され、政府を代表して宮崎茂一科学技術庁長官が挨拶と乾杯、また、受賞者夫人の“内助の功”を讃えて青木正久環境庁長官による乾杯が行われた他、鈴木都知事(代読)、

ニカラグア共和国駐日特命全権大使ウエソ閣下からも祝辞が述べられました。

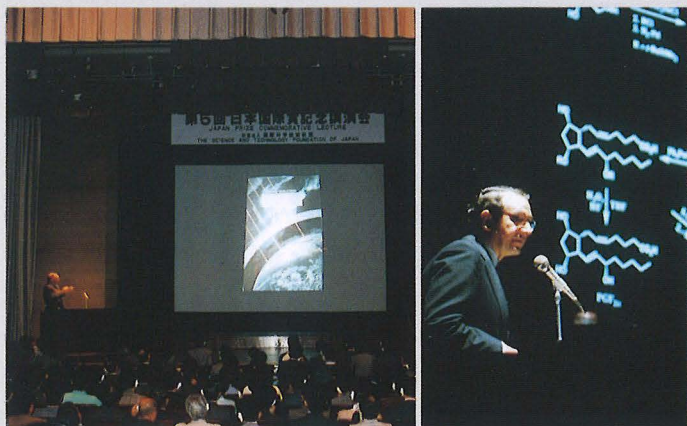
最後に謝辞に立ったローランド博士は「あたたかい歓迎を受け、忘れ得ぬ一日となりました」と挨拶。コーリー博士も「科学は人類を一つにする役割を果たしています」と感謝の言葉を述べ、出席者の大きな拍手を受けるなど終始なごやかな雰囲気の中終宴となりました。

授賞式前後の一週間は「日本国際賞週間」。受賞者は皇居を参観した他、東京と京都での記念講演会並びに学術懇談会に出席、東京都知事・京都府知事表敬などを行いました。



記念講演会 (4/11・14)

東京・朝日ホールと京都・国立京都国際会館での記念講演会。第一線の科学技術者、研究者に加え、一般参加者も多数参加。立見ができるほどの人気で、両博士の講演にも一層熱がはいりました。



京都でのひととき (4/15)

京都では、多忙な公式行事のあい間をぬって、二条城を見学。また桜が満開の日本庭園を散策し、日本情緒を満喫した両博士でした。



JAPAN PRIZE

日本国際賞とは

日本国際賞は、世界の科学技術者を対象に、科学技術の分野において、独創的、飛躍的な成果をあげ、科学技術の進歩に大きく寄与し、人類の繁栄と平和に著しく貢献したと認められる人に与えられる賞です。

毎年2つの科学技術分野が特定され、国内・国外の科学者からの推薦に基づき財団の独立した審査委員会で受賞者を選考します。

受賞者には、日本国際賞として賞状、賞牌及び副賞5,000万円(一分野につき)が贈られます。4月の授賞式・祝宴は政界・財界・各界名士多数が出席して盛大に行われます。

同賞は今年で第5回目を迎えましたが、受賞者は次のようになります。

1985年(第1回)

「情報・通信」分野

ジョン・R・ピアース博士(米)

「バイオテクノロジー」分野

E・カチャルスキー・カツィール博士(イスラエル)

1986年(第2回)

「材料工学」分野

デビッド・ターンブル博士(米)

「医療技術」分野

ウイレム・J・コルフ博士(米)

1987年(第3回)

「生物改良」分野

ヘンリー・M・ビーチェル博士(米)

グルデブ・S・クッシュ博士(印)

「エレクトロオプティクス」分野

セオドア・H・メイマン博士(米)

1988年(第4回)

「エネルギー技術」分野

ジョルジュ・バンドリエス博士(仏)

「予防医学」分野

ドナルド・A・ヘンダーソン博士(米)

蟻田 功博士(日)

フランク・フェナー博士(豪)

リュック・モンタニエ博士(仏)

ロバート・C・ギャロ博士(米)

1989年(第5回)

「環境科学技術」分野

F・シャーウッド・ローランド博士(米)

「医薬科学」分野

E・J・コーリー博士(米)

1990年(第6回)「日本国際賞」 受賞者審査始まる

1990年(第6回)「日本国際賞」の対象分野は、「総合化技術・設計・生産・制御技術」と「地球科学」の2分野です。科学技術の分野は著しい発展を遂げていますが、今回は、従来の学問分野では割り切れない境界領域や総合的な科学技術分野にもスポットをあて、日本国際賞にふさわしい分野が選ばれました。すでに、世界各国から多数の推薦状が集まり、来年の受賞者選考に向けて審査の作業が進められています。

「総合化技術——設計・生産・制御技術」分野

科学の研究がもたらす発明・発見や新知識が新しい生産物となって人間社会の福祉や便益に役立てられるためには、さらにいくつかの技術の階段を経なければなりません。すなわち、その発明・発見・新知識に基づいて、目標とする生産物を設計し、その効率的な生産方法を開発し、さらにその生産または利用に関わる制御技術を確認することが必要です。事実、このようないわば「総合化技術」とも呼ぶべき領域で、人間社会に大きな貢献を果たした例が見られます。

「総合化技術」は数理学、計算科学、情報科学、システム工学、制御理論、ロボティクス、材料処理及び加工工学、生産管理工学等、多岐にわたる学問分野に立脚します。人間社会に有用な生産物を生み出すために上記のような技術の総合化に成功した業績及びそのような総合化の基礎となる上記の諸学問・技術の進歩への貢献を対象とします。

「地球科学」分野

地球上の気象、地震、火山等の自然現象は私たちの日常生活に密接に関係していますが、地球科学の進展でその理解が深まりつつあります。ここでいう「地球科学」は包括的な科学で、一惑星である地球とその関連分野についての基礎及び応用研究をめざすものです。

ここで授賞対象とする「地球科学」には、地質学、地震学、気象学、海洋学等の伝統的分野ばかりでなく、地球テクニクス、大気・惑星間空間科学、放射能・磁気年代学、地球資源科学、探査技術等の新しい総合的研究も含まれます。

会長逝去のお知らせ



国際科学技術財団の松下幸之助会長が去る4月27日逝去いたしました。94歳。松下会長は、松下電器産業(株)の創始者で、日本国際賞創設のために基金を寄附し、1985年の国際科学技術財団設立以来、同財団の会長を勤めて来られました。